

隋唐初の複都制―七世紀複都制解明の手掛かりとして

村元 健一

要旨 古代難波は、日本の複都制を考える上で欠くことのできない地域である。複都制を考えるため、そのモデルになったとされる中国唐代の長安と洛陽を概観し、制度の実態に迫ることが本稿の目的である。隋から唐の高宗期にかけて、制度として複都制を取り入れたのは隋の煬帝と唐の高宗のみである。唐の洛陽は隋の煬帝が実質的に都城として築いた都市であり、唐がそのまま継承した。そのため、結果的に京師である長安に匹敵する都城として洛陽が並立することとなった。高宗は武氏立后後、洛陽重視が顕著となる。日本が中国の複都制を知ったのは、この高宗期であり、唐代でも長安・洛陽の力が最も均衡している特異な時期だったことになる。洛陽宮は再興の途中であったが、その規模は太極宮に匹敵するものであり、複都制とは同規模の都城が並び立つ制度と認識されたものと思われる。前期難波宮が飛鳥宮を凌駕し、後の藤原宮に近い規模を持ちえたのは以上の中国の状況によるのである。

はじめに

古代難波は、天武朝の末期に複都の一つとなり、また聖武朝にも京の一つとなっており、古代日本の複都制を考える上で欠かすことのできない位置を占める。難波に置かれた宮室の規模を見ると、飛鳥時代の前期難波宮は飛鳥宮を凌ぐ規模を有し、奈良時代の後期難波宮も平城宮に比して小型化しているものの、他の宮室と同様に朝堂院、正殿、内裏があり、中枢機能を整備している点が注目される。天武朝では飛鳥と難波、聖武朝では平城・恭仁と難波というようにほぼ同じ構造を持つ宮室が併存する状況が現

出したことになる。これは単なる離宮の設置とは異なる意味を持つ。複都制については、瀧川政次郎氏が、複都制そのものが日本には不要なものであり、単に中国の模倣にすぎず、積極的な意味を見出すことはできない、と論じた〔瀧川一九六七〕。近年、複都制への関心も高まり、専論も相次いで出されているが〔1〕、なお複都制とは一体何か、実際の機能は何か、という本質的な議論の深まりを見せていないとの指摘もあり〔館野和己二〇一〇〕、実態については不明な点が多い。このような状況の中、瀧川氏の研究以来、日本の複都制が中国の制を模倣したものであることは、一貫して認められているところである。日本に最初に複都制が見られるのは

先に触れたように七世紀末の天武朝であり、天武が模倣したであろう中国の複都の機能を明確にすることで、天武が複都制を導入した意図を考える端緒を得られる、との見通しを立てることができる。

天武朝と同時代の唐の複都制は、時代によって変化するが、七世紀にあつては長安と洛陽である。古代日本の複都制への影響を論じる前にまず、この両京の特性を明らかにする必要がある。それは、宮城の規模のみならず、都城の大きさにおいても両京は他都市に比べて突出したものであり、複数の都城の規模がいずれもこれほど巨大なことは、隋唐に到る中国史の中でも極めて特異な事例だからである。まずは隋唐の長安、洛陽が双方ともに非常に広大な都城であつたこと、規模の点で洛陽は長安よりも若干劣るものの、決して遜色のないものであつたことを確認しておきたい。

しかし、中国でも複都制の研究は決して進んでいるわけではない。隋唐の長安と洛陽についても、この両京の存在の意義を説くことはあつても、なぜこのような巨大な都市として生まれる必要があつたのかを問題にした研究はさほど多くはない。筆者は、この問題を考えるにあたり、まずは隋の大興と東京洛陽の相違点を確認した上で、東京がなぜ巨大化したかを考察した〔村元二〇一五〕。本稿では古代日本複都制の淵源を探る試みとして、前稿を受ける形で隋から唐初の複都制を概観し、隋唐複都制の在り方を明らかにしたい。なお、都城を考察するにあたり京畿の問題は密接に関連している。本稿で対象とする時代のうち、唐初については蕭錦華氏による詳細な研究があり、複都制を考える上でも極めて重要な問題が提起されている〔蕭二〇〇八〕。各朝の外政、内政を考慮しつつ論を組み上げた重厚な論考であり、本稿でも蕭氏の所説を参照しつつ、議論を進めたい。

まずは時期により洛陽の扱いがどのように変わっていたかを概観するた

め、主に皇帝の行幸記事を中心に長安・洛陽の各朝における扱われ方を見ていくことにしたい。以下、特に出典を明記しないものは『隋書』『旧唐書』の本紀もしくは『資治通鑑』に依る。

第一節 隋の洛陽

①文帝期

文帝の洛陽行幸は開皇四年（五八四）と一四年（五九四）の僅かに二度である。行幸の目的はいずれも関中飢饉により洛陽に就食するためで、滞在期間はそれぞれ一年にも満たない。後に唐の高宗から玄宗期にかけて、関中飢饉により大挙して洛陽に行幸することになるが、その先例がすでにこの時期に見られることは興味深い。ただし注意しておきたいのは、この時の行幸先の洛陽とは、隋唐洛陽城の造営以前であるため、旧来の洛陽、すなわち現在の遺跡名という漢魏洛陽城であることである。この時の洛陽が一定期間、皇帝滞在を可能とする施設を有し、かつ多量の穀物を備蓄しうる糧倉を備えていたことを示す。隋初の洛陽の状況を明らかにするために、北周期以降の洛陽の様子を確認しておきたい。

北魏の都城であつた漢魏洛陽城は、北魏の分裂以後、荒廢していたが、北周の宣帝により復興し、旧北斉領である山東支配の鄴に代わる拠点と位置付けられた。また、洛陽宮が置かれ、太極殿も造営されていたことが確認できる〔村元二〇一〇〕。急速に進んでいた洛陽城の復旧は、宣帝の死後、静帝期に実権を握った楊堅により中止される。だが、この時点で、洛陽宮を破壊することはなく、山東支配の拠点という位置づけは変わらなかつたと考えられる。それを示すのが次の処置である。北周の大象二年（五八〇）、

楊堅は、旧北齊領域を総管し、鄴に鎮していた尉遲迥を滅ぼした後、九月に世子勇を洛州総管、東京小冢宰とし、洛陽を拠点として旧北齊領を管轄させている⁽²⁾。隋建国後もこの流れは変わらず、開皇二年(五八二)には河南道行台尚書省を置き、秦王俊を尚書令としているが、翌年に廃している⁽³⁾。文帝による最初の洛陽行幸前年の開皇三年(五八三)には洛州に河陽倉が置かれており⁽⁴⁾、洛陽が黄河や洛河の水運を利用して山東の穀物を関中に転漕する際の集積地の一つとして一定の役割を担っていたことがうかがえる。以上のことから、洛陽には北周末以来の宮殿区が未完成ながら存在していること、山東支配の拠点としての施設があり、それらが皇帝や供奉する百官らの滞在に用いられたであろうこと、さらには附近に河陽倉が設置され、穀物の備蓄が行われていたことが分かる。文帝の洛陽行幸は以上のような状況のもとで行われたのである。

このように隋文帝が洛陽を山東統治の拠点として重視し、さらに大規模な糧倉を置き、宮城も存在していたことが分かるが、ここに都を置くという構想を認めることはできない。そのことは楊堅が、北周の宣帝により起工されていた洛陽宮の造営を中止していることや、州、郡の長官として、それぞれ牧、尹が置かれたのは大興の所在する雍州、京兆郡だけであったことから窺うことができる⁽⁵⁾。

参考までに文帝の行幸先を見ると、関中にある仁寿宮が他を圧して多い⁽⁶⁾。標高の高い場所に築かれたこの離宮は、避暑に使われることが多いが、時にはここで越年することもあり、大興城と並んで文帝の重要な拠点となっていた。だが、仁寿宮は郭城を持たず、宮城には儀礼のための殿庭もなく、また特別な行政区を設置されるわけでもなく、都城と言えるものではない⁽⁷⁾。

隋文帝は、関中の大興城での一極支配を考えており、洛陽宮もあくまで離宮の一つという位置づけだったと見なしている。この地を文帝が重視したのは、旧北齊領域の安定と、江南の陳への対応のためのものであり、統一政権誕生と安定までの一時的な施策と見なすことができる。経済的には河陽倉の設置は重要だが、その設置の目的は、食貨志が記すように山東の糧食を大興に移送するための中継点の一つということであり、洛陽を漕運の拠点にしようとしたわけではない。関中飢饉の際に文帝が行幸先に洛陽を選んだのは、漕運の最大の難所である三门峡以東で、糧倉があり、皇帝や官人の長期滞在に耐えることができる施設のある都市という条件を満たしていたからであろう。

② 煬帝期

煬帝は即位直後に起きた実弟の并州総管漢王諒の反乱を鎮圧すると、并州から河南に徙民を行っている⁽⁸⁾。この処置では、京師である関中の大興ではなく、洛陽周辺の人口の充実を図っている。煬帝は即位直後に洛陽(漢魏洛陽城)を廃し、新たに西方に都城を造営し、京師大興と並ぶ東京とする⁽⁹⁾。ここに隋の複都制が成立したことになるが、并州からの徙民は新たに造る東京を充実させるためのものだったことになる。

周知のように煬帝による東京造営は、単に都城の造営に留まるものではなく、大運河の開削と一連の事業であり、大運河による漕運の基点としての役割を有していた。そのため、煬帝の造都構想の段階で東京周辺には改めて大規模な倉城が設置されており、確認できるものに興樂倉(洛口倉)、回洛倉がある。後者は東京城外のすぐ北東に位置しており、漕渠と水路で繋がっていた⁽¹⁰⁾。なお、唐代の倉城として著名な含嘉城には、この時期、

善は置かれておらず倉城ではなかったと思われる〔李永強二〇一一a〕〔宇都宮美生二〇一六〕。

造営された東京は、京師大興よりも規模はやや小さいが、紫微宮（宮城）、太微城（皇城）を備え、歴代の都城に比しても都城として十分な機能と規模を持ち、隋文帝が多用した離宮の仁寿宮とは明らかに異なるものであった（図）。都城の住民を収容する郭の部分に関しては郭壁が未整備であったものの、郭門が設置されて都城の規模は確定されており、その大きさは他都市に比して突出した規模となっていた。東京の特長で注目すべき点に、宮殿や都城の立地環境などが煬帝の嗜好を反映し、極めて豪華なものとなっていることが挙げられる〔村元二〇一五〕。周知のように、煬帝は大興よりも明らかに東京を重視しており、ここを自らの都城と考えていた。後に東都と改称されるものの、当初の「東京」という名称がそのことを端的に物語っている。

煬帝が在位中に京師大興を訪れたのはわずかに四度である。うち、最初は大業三年（六〇七）の北方巡狩の途次であり、二、三度目は大業五年（六〇九）の西方巡狩の往還であり、最後は大業一〇年（六一四）である。いずれも二ヶ月にも満たない短期の滞在であった。こうした状況のため、京師でしか行えない南郊祭祀を煬帝が行ったのは、大業一〇年一月の一回のみである。おそらく前年の高句麗親征の失敗と関係があるのだろう。こうして見ると、煬帝期の東京偏重が際立つ。改めてこの時期の東京と京師大興の役割をまとめておこう。

東京洛陽が煬帝の実質的な政治拠点であったことはその造営の経緯と利用のされ方から明らかであるが、妹尾彦彦氏は、東京の構成要素に南朝建康の影響を多分に認めることができることを指摘し、隋の南北統一を文化

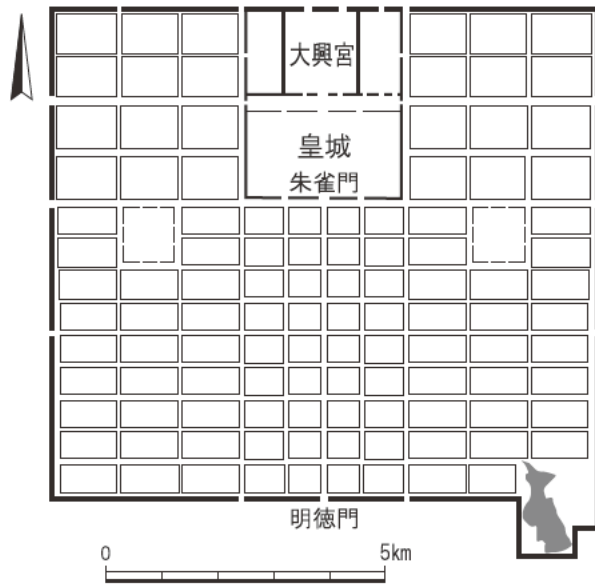
的に表徴したものと極めて高く評価する〔妹尾二〇一三、二〇一四〕。煬帝が新たに都城を営んだ理由としても妥当な指摘である。一方、大興城は開国の君主である文帝が造営した都城であり、その設計には各所に正統な中華の支配者の居城であることを示す設計がなされていた〔妹尾二〇〇一〕。当然ながら、正統な皇帝であることを明示するための祭祀施設である太廟、郊壇はすべて大興に所在している。

煬帝期のこのような両都城の在り方を見れば、政治的、経済的、文化的な「京」は東京であるものの、京師大興には宗廟、郊壇といった中華皇帝としての正統性を示す礼制施設が存在しており、この点に両京が並び立つた原因を求めることができよう。煬帝は宗廟を洛陽に移設しようとしながらも結局はそれを断念しているように⁽¹⁾、大興の京師としての地位を廃そうとは考えなかった。その点は煬帝期に京師だけでなく東都を中心とした畿内が設定されていたことから明らか⁽²⁾にできよう。即ち『隋書』巻二八・百官志下には煬帝期の官制として、

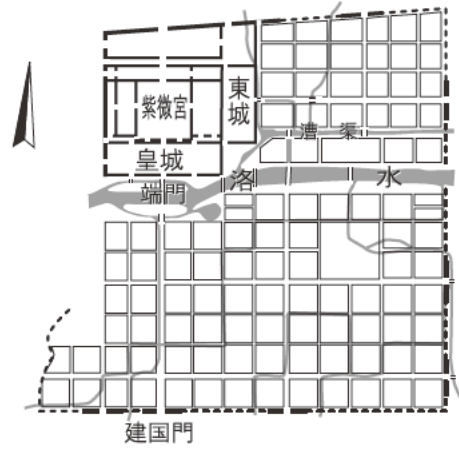
司隸臺、大夫一人、正四品。諸の巡察を掌る。別駕二人、従五品。畿内を分察し、一人は東都を案じ、一人は京師を案ず。刺史十四人、正六品。畿外を巡察す。

とあることから、東都と京師がともに畿甸を有していたことが分かる。さらに両都市が含まれる畿内、煬帝期で言うならば京師周辺の京兆郡と東都周辺の河南郡の行政機構が、官員の構成、官秩のいずれの点でも同等に設定されていたことからこの点を明らかにできる。同じく百官志下には、

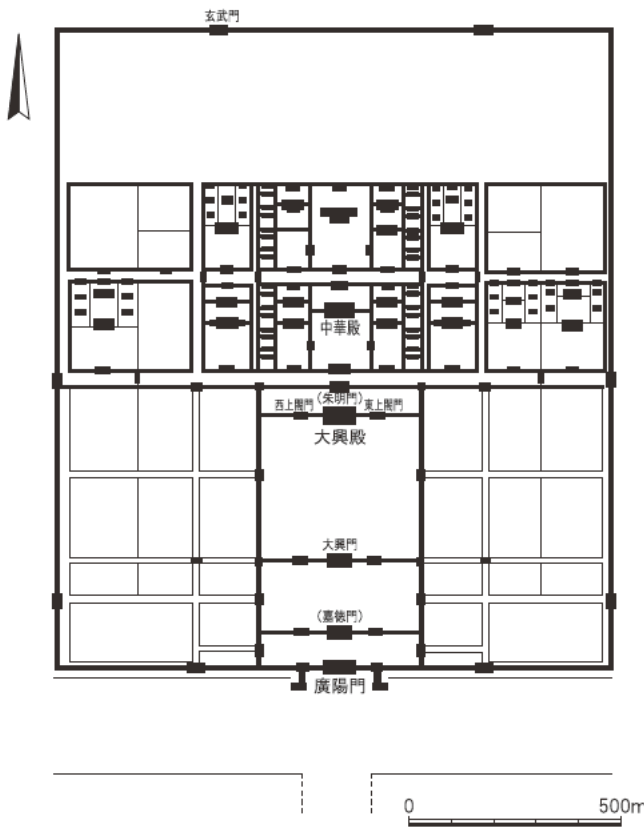
州を罷め郡を置き、郡に太守を置く。上郡は従三品、中郡は正四品、下郡は従四品なり。京兆、河南は則ち俱に尹と爲し、並びに正三品なり。長史、司馬を罷め、贊務一人を置き以て之に貳す（注・京兆、河



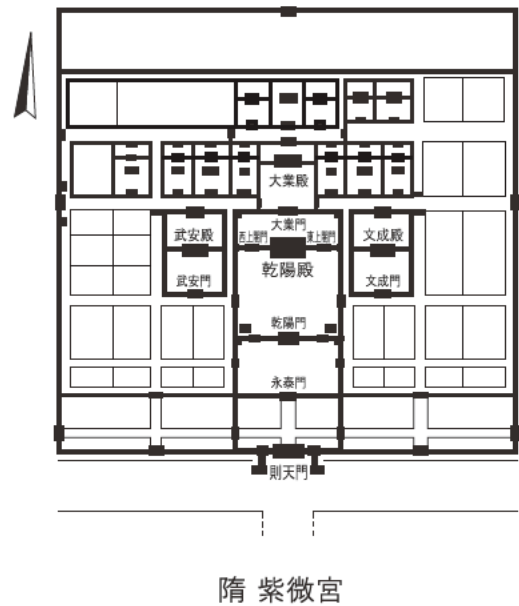
隋 大興城



隋 東都城



隋 大興宮



隋 紫微宮

大興城、大興宮とも〔傅熹年 2001〕所掲図を基に一部改変の上、作図。
洛陽城は〔李永強 2011b〕を基に作図、紫微宮は〔傅熹年2001〕所掲図を
基に〔中国社会科学院考古研究所 2014〕の成果を加味し改変して作図。

図 隋の大興と東都とその宮城

南は從四品、上郡は正五品、中郡は從五品、下郡は正六品。次いで東西曹掾（注：京兆、河南は從五品、上郡は正六品、中郡は從六品、下郡は正七品）、主簿、司功・倉・戸・兵・法・士曹等の書佐を置く、各おの郡の大小に因りて増減を爲す。：大興、長安、河南、洛陽の四縣令、並びに増して正五品と爲す。

とあり、郡の長官としてそれぞれ太守ではなく尹が置かれ、尹やその属官の官秩は他郡よりも高く、その点は隸下の四県の令も同じであった。このように制度上、兩都市は同格のものとされていた。煬帝が大興城を軽視していなかったことは、大業九年（六一三）の大興城外郭の造営にも認めることができ（12）。これは関中で反乱の頻発という特殊な情勢下ではあるが、京師である大興の守備を重視したためといえる。また新たに造営された東京の住民は、予州郭下の民⁽¹³⁾、すなわち漢王反乱鎮定後の并州移戸を含んだ人々と天下の富豪を徙民させたものであり⁽¹⁴⁾、大興の住民を移住させたものでない。これは後に武則天が神都洛陽の充実のため、長安周辺の雍州の民を大規模に徙民させたのとは異なる方法であり⁽¹⁵⁾、煬帝の意図が必ずしも大興の地位を落とした上で東京の単都制を目指すものではなかったことを示していると言えよう。

③ 隋代の洛陽と複都制

本節で述べてきたことを中心に、隋代の洛陽と複都制についてまとめておきたい。

隋の文帝楊堅に複都制の構想はなく、大興城だけの単都制を考えていたことは明らかである。北周末期から南朝陳の平定にかけては洛陽を東方統治の拠点と定めたことはあったが、あくまで南北統一とその安定までの一

時的なものであり、洛陽を都城と見なした制度的な整備は行わなかった。文帝期は大興以外では、関中にある離宮の仁寿宮への行幸が目立ち、洛陽行幸はわずかに二回だけであり、関中を重視していたことが分かる。

この状況を一変させたのが煬帝である。煬帝は、都城の規模こそ大興に劣るものの、宮城の壮麗さでは大興宮を凌駕する東京を造営し、都畿を設け、河南尹の官品も京師と等しくするなど制度の整備を行い、大興に代わる実質的な拠点とする。しかしながら、皇位の正統を示す礼制建築である宗廟や郊壇などは大興に置かれたままであり、また、大興の地位を下げるような施策、例えば大興からの徙民や城郭の縮小あるいは官制の改変などは行っていない。ここに実質的な都城である洛陽と象徴性を持つ都城の大興が並立する複都制が誕生する。この隋の複都制の誕生の経緯と煬帝期の拠点の在り方を見れば、煬帝は大興に代わる実質的な新たな都城として洛陽を築いていたと見なすことができる。煬帝治世下の京師大興城の地位は、東京重視に加えて離宮である江都宮への行幸も目立ち、文帝期に比べ相対的に低下していることは否めないが、京師であることは維持し、東都と並ぶ支配の中核であり続けたのである。

こうして、煬帝期には都市の規模としては大興に準じ、宮城の個々の建築の壮麗さでは大興を凌駕する東都が、京師大興と並び立つという、壮大な複都制が現出した。この巨大な二つの都城が物理的に唐にそのまま継承されたのである。

第二節 唐前期の洛陽

① 高祖期

唐の高祖李淵は隋の京師大興をそのまま接収し、長安と改名して都城とする。一方の洛陽は、隋末に洛陽に拠った王世充政権の降伏後、武徳四年(六二二)五月には宮城の主要部が焼却されている。この時に破却されたのは建國門、端門、則天門、乾陽殿であり⁽¹⁶⁾、洛陽の南北中軸線上の象徴的な建物である(図)。煬帝の奢侈を代表する建築とされ、政治的パフォーマンスとして破却されたのだろう。それ以外はそのまま唐に接収され、山東統治の要地として利用される。王世充政権を倒した直後の武徳四年(六二二)七月に、屈突通を陝東道大行台右僕射として洛陽に置いていることから、その点は明らかであろう。しかしこの体制も山東が平定されるにつれ改められていく。武徳六年(六二三)には東都を洛州と改め、武徳九年(六二六)、陝東道大行台を廢し、洛州都督府を置いている。一連の処置により隋の煬帝期のような都城としての洛陽の地位は失われたのである。

これを示すように、貞観元年(六二七)の関中飢饉でも高祖、太宗ともに洛陽就食は行っていない。さらに言えば、在位中、高祖は一度も洛陽に行幸はしておらず、関中から出ることもなかったのであり、徹底して関中を重視していたと言える。唐の高祖は東都を洛州とすることで、制度上、隋煬帝の複都制を廢し、長安だけを都城として重視したのである。

②太宗期

太宗は、貞観四年(六三〇)には早くも洛陽宮の再建を考えるが、給事中の張玄素の反対により取りやめている⁽¹⁷⁾。しかし洛陽宮再興は中止されることなく、翌貞観五年(六三一)、洛陽宮の復興を実現したが、建物が華美だったため、すぐさまこれを破却している⁽¹⁸⁾。太宗の洛陽宮復興

はここで一端中断するが、貞観十一年(六三七)には洛州を「洛陽宮」と改称する。高祖と異なり、洛陽を重視する姿勢を認めることができる。次に太宗の洛陽行幸を『旧唐書』本紀および『資治通鑑』から見ていくと、以下の三回の行幸が確認できる。

第一次…貞観十一年(六三七)二月～二年閏月。滞在期間はほぼ一年間。この時に洛州を「洛陽宮」と改称。

第二次…貞観十五年(六四一)正月～二月。滞在期間はほぼ一年間。

第三次…貞観十八年(六四四)一〇月～一九年二月にそのまま高句麗

親征を行う。親征にあたり京師留守は房玄齡、洛陽宮留守は蕭瑀とし、太子に監国させる体制を整える。長安帰還は翌二〇年

三月。

太宗期になり洛陽が唐で初めて皇帝の長期にわたる滞在地として整備され、「洛陽宮」になっていることは高祖期と異なる。洛陽宮復興への動きもみられるが、『西京記』には高祖期まで荒廢していたとの記述もあり⁽¹⁹⁾、洛陽宮がどこまで復興していたのかは審らかにできないが、本格的な宮城再興にはいたっていなかったと見るべきであろう。離宮の設置のみで、「都」や「京」が置かれたわけではなく、隋煬帝期のように制度として「複都制」をとったとはいえない。この時期には、洛陽宮の華美な煬帝の失政という負のイメージが強く、洛陽再建の足かせになっていたのである。

③高宗期

高宗は七回も洛陽に行幸しており、その行幸の多さだけでなく、滞在期間の長さも注目される。また、洛陽行幸が始まったのは貞観二十三年(六四九)の即位から八年も経ってからである。以下、各行幸を概観しておこう。

第一次… 顕慶二年（六五七）正月～三年二月。ほぼ一年間にわたる東方巡狩の一環。洛陽宮を東都とし、洛州官員の官品を全て雍州に準じさせ²⁰、ここに唐の複都制が成立する。

第二次… 顕慶四年（六五九）閏月～龍朔二年（六六二）四月。滞在期間は約二年半で、この間、并州行幸も行っている。

第三次… 麟徳二年（六六五）正月～乾封元年（六六六）四月。滞在期間は一年強で、この時、洛陽宮の中心殿舎である乾元殿が落成し²¹、宮城の体裁を整えている。この間、泰山封禪を行っている。

第四次… 咸亨二年（六七二）正月～三年一月。滞在期間は二年。前年の関中飢饉による就食のため。

第五次… 上元元年（六七四）一月～三年四月。一年半の洛陽滞在。この洛陽滞在中の六七五年に皇太子弘が薨じ、孝敬皇帝と追尊し、洛陽近郊の恭陵に埋葬。

第六次… 儀鳳四年（六七九）正月～永隆元年（六八〇）一〇月。滞在期間は二年一〇ヶ月。前年の旱害に起因すると考えられる。この間、嵩山にも行幸している。

第七次… 永淳元年（六八二）四月～弘道元年（六八三）。滞在期間は約一年半で、弘道元年十二月に洛陽真観殿で崩じている。前年の関中飢饉による就食。嵩山行幸。

最初の洛陽行幸である顕慶二年（六五七）には洛陽が東都となり、同時に東都の諸官を京官と同じ官品としたことから、洛陽が明確に制度上の都となったことが明らかとなる。蕭錦華氏は、この時に洛州が畿甸となったとしており「蕭二〇〇八」、従うべき指摘と考える。これに伴い宮城の整

備が進み、麟徳二年（六六五）には正殿である乾元殿が完成し、隋煬帝期の繁栄をとりもどしたかのような観がある。高宗期のこの洛陽重視の方針は、太宗期にその萌芽が認められたものを大きく進めたものと言える。ここで注目したいのは、高宗の洛陽行幸および洛陽宮再建の動きが、永徽六年（六五五）の武昭儀立后の後ということであり、高宗の洛陽重視は高宗本人の意向ではなく皇后武氏の意志であった可能性がある²²。また、高宗期の洛陽行幸を見ると、七回のうち、関中飢饉による就食は咸亨二年、儀鳳四年、永淳元年の三回であり、行幸の目的が経済的なものだけでないことは注目される。さらに、上元元年の皇太子李弘の死去に伴う恭陵造営は、洛陽で初めての礼制関連施設の設置と位置付けることができる。これらの点は次項で詳しく見ていきたい。

④ 唐初の洛陽と複都制

唐になると、隋代の京師と東都が東西に並ぶ姿は物理的には継承されたが、その内実は大きく変容した。すでに述べたように唐の高祖期には東都は洛州とされ、都としての地位は失われる。また、関中飢饉があっても洛陽就食は見られず、高祖の行動範囲は関中に限定される。蕭錦華氏は、この時期の洛陽について、高祖本人には洛陽を拠点化する意思はあったものの、洛陽を平定した秦王李世民的勢力拡大を警戒したため、洛陽を一時的な軍事拠点に留めたと考えている「蕭二〇〇八」。そうした側面はあったかもしれないが、高祖の動向を確認する限りでは、隋末から唐初にかけては山東や江南の群雄を平定した直後であり、関中以外が決して安定した状況とは考えられないにもかかわらず、洛陽に拠点を設けていないことから、長安の一極化を図ったものとみなしていいだろう。このような状況は、隋

の文帝期と似ている。

太宗期には洛陽行幸が行われるようになり、それも就食を目的としたものではなく、山東地域の巡視や高句麗遠征など東方経略にかかるものであった。こうした行幸に合わせるように洛陽は洛州から洛陽宮と改名され、隋の煬帝の宮城の復興が図られる。蕭錦華氏は、太宗は泰山封禅や高句麗遠征など東方に課題が多かったことから、洛陽を重視し、本格的に都城として再興しようとしたが、西方の国境地帯の緊迫化と泰山封禅中止などの事情により、その計画は頓挫するものの、次の高宗朝への準備を行ったものと評価しており、妥当な見解と思われる〔蕭二〇〇八〕。太宗の目指した洛陽の機能とは、正に隋以来の山東経営の拠点という位置付けを継承したものであり、蕭氏が指摘するように高宗期の前奏といふべき動きであった。ここで改めて唐の高祖・太宗期の為政者の対洛陽観を見ておこう。

高祖 「東西兩都」⁽²³⁾

太宗 「洛陽形勝之地」⁽²⁴⁾

褚遂良 「兩京心腹」⁽²⁵⁾

高祖、太宗が、洛陽を行政上の「京」や「都」としていないにもかかわらず、このような表現が見られるのは、洛陽の地政学的な優位性に基づくものであると同時に、直近の隋煬帝期の華やかな東都の記憶が反映されたものといえるだろう。一方で洛陽の壮麗な宮城は煬帝の奢侈の象徴として忌避すべきものであり、その認識も太宗朝では強かったのである。

唐の高宗期には遂に洛州を東都に昇格させ、ここに煬帝以来の複都制が再現された。これに伴い洛陽の正殿・乾元殿の造営などが行われ、洛陽の整備が進む。洛陽にかかわる動きは、武氏立后以後に顕著となる事象であり、高宗とそれを補佐する長孫無忌以下の元勳層の意志ではなく、皇后武

氏の強い意向が影響していると考えられよう。武皇后の誕生は、同時に太宗朝からの重臣である長孫無忌、褚遂良らの失脚を伴うものであり、元老たちの影響力が薄れたことを如実に示している。これにより、高宗は長安、洛陽を頻繁に往還するようになった。高宗の「兩京朕東西二宅」⁽²⁶⁾という言はそうした事情を物語るものである。

山東情勢が切迫していない中で、武氏が立后後に洛陽を重視した理由として考えられるのが、自らの立后に反対した重臣達―長孫無忌、韓瑗、来濟、褚遂良ら―が、元勳や宰相であり、多くが皇族である李氏との関係も深く、関中に拠点を置いていたことを嫌ったためと考えられる。一方で武氏立后に賛成したものは、許敬宗が太宗の秦王府十八学士の一人だった以外は、崔義玄、袁公瑜、李義府らは皇室の李氏との関係は希薄で、出身も山東が多い。武氏立后についての支配階層の出身地に基づく東西対立を見ることについては、早くに松井秀一氏の批判があり〔松井一九六六〕、また閩隴集団の存在そのものについては、山下将司氏が疑義を呈している〔山下二〇〇二、二〇〇三〕。だが、あえてこの状況を図式的に表し、本貫にこだわらず長安を唐の元勳らの影響力の強い拠点とみなせば、武氏を擁立した新興の官僚層が、李氏とそれを補佐する元勳層の影響が強い長安を避け、それに代わる新たな拠点として洛陽を選んだことは十分に想定される。何よりも隋文帝が築き、それを継承して唐の都となった長安は、唐三代にわたる経営を経て、あまりに唐室李氏の都としての象徴性を持ちすぎたことが、李氏を排斥し、武氏が権力を掌握する上では不都合だったのである。武氏による洛陽重視は、それぞれの勢力の出身地による閩隴対山東という東西対立の結果と単純化できないとしても、武后が李氏の都である長安を避けた結果といふことは言えるだろう。長安に代わり都となる地を

求めるとすれば、地理的にも、また施設の点からも洛陽が最もふさわしかったのである。このように高宗期の洛陽重視は、高宗の意向というよりも皇后武氏主導によるものとも考えることができ、これまでの唐朝の動きとは異質なものとと言える。なぜなら、史念海氏や蕭錦華氏も指摘するように〔史一九九七〕〔蕭二〇〇八〕、この時期は隋代や唐初とは異なり、山東に組織的に王朝に対峙する勢力は認められず、洛陽に積極的に都を設置すべき理由を見いだせない。高句麗への対応などで東方が重視されるようになったと言っても、それが直ちに都の設置につながるかと言えば、太宗期の事例を見れば必ずしもそうとは言えず、結局は別の目的、すなわち長安に代わるべき新たな都の建設ということを考えざるをえないのである。

高宗期でもう一点重要なのは、蕭錦華氏も指摘するように、洛陽郊外に故の皇太子李弘を孝敬皇帝と追尊し、埋葬した恭陵が築かれたことである〔蕭二〇〇八〕。恭陵は高祖献陵、太宗昭陵のある関中ではなく、洛陽郊外に営まれた最初の唐の「皇帝陵」である。その構造は高祖献陵と同じく起墳式の陵であるが、墳丘の規模は献陵を凌ぎ、陵前には献陵・昭陵では顕著ではない石刻を立ち並べた神道が出現しており、追尊とはいえ、歴代の皇帝陵と比して決して遜色がないどころか、超える要素すらある²⁷⁾。皇帝陵という皇帝家に関わる祭祀施設が洛陽に営まれたことは、隋煬帝期でさえ祭祀建築が大興のみにあったこととは異なるものと評価できるだろう。都城と陵墓のセットが長安、洛陽の二か所に誕生したことにより、洛陽の重要性は揺るぎないものとなり、洛陽は都としての内実をより豊かなものとしていったのである。

このように高宗期に洛陽は、隋の煬帝期の繁栄を取り戻し、制度上も実態としても長安と並ぶ都城となっていたのである。

第三節 遣唐使の見た長安、洛陽

以上の七世紀の中国の複都制の実態を踏まえ、日本側の記録に残る複都制を確認しておこう。周知のように、『日本書紀』天武天皇一一（六八三）年一二月庚午条に、

また詔して曰く「凡そ都城宮室は一處に非ず。必ず兩參造らん。故に、先ず難波に都せんと欲す。是れ以て百寮の者、各おの往きて家地を請え」と。

とあるように、天武の晩年に複都制が打ち出される。天武がなぜ「都城宮室は一處に非ず」という発想にいたったのかは明らかではない。ただ、天武以前に日本には唐の長安・洛陽を東西京とする認識が伝わっていたことは間違いない。特に興味深い記録を残しているのが斉明五年（六五九）に派遣され、唐の東方経略の關係から抑留されてしまい、斉明七年（六六一）に帰国した第四次遣唐使である。斉明天皇五年（六五九）唐の顕慶四）七月戊寅条に引く『伊吉連博徳書』には、

潤十月一日、行きて越州の底に到る。十五日、驛に乗り入京す。廿九日、馳せて東京に到る。天子は東京に在り。

とある。十五日に入京した「京」とは長安のことであり、そこで皇帝不在が分かったため、急ぎ東へ戻り、二十九日に「東京」すなわち洛陽へ到着したのである。斉明天皇六年（六六〇）顕慶五）七月乙卯条に引く同書には、

庚申年八月、百濟已に平らぐの後、九月十二日、客を本國に放つ。十九日、發するに西京よりし、十月十六日、還り東京に到り、始めて阿利麻等五人と相い見ゆるを得。

とある。この史料から明らかかなように、長安、洛陽の両都市を往還した伊

吉博徳は、それぞれを「西京」「東京」と表記しており、対等の「京」と認識していたことが分かる。すでに見たように、制度的には唐高宗期に洛陽が「京」であったことはないが、この時期は洛陽重視が進んでおり、乾元殿はまだ起工されていないが、すでに東都として整備が進み、皇帝も頻繁に滞在する都市となっていた。何よりも博徳らは洛陽で高宗に拝謁し、さらに洛陽宮城門に引き立てられ、恩赦される百済王族の姿を目撃しており⁽²⁸⁾、ここが皇帝権力の所在地であることは強く印象付けられたと考えられ、彼らが長安、洛陽を対等の京と認識したことは、むしろ当然のことともいえる。このような情報が斉明朝末の日本に伝えられていたのである。同時代の唐の複都制の存在が、倭王権にやがて複都制を導入する際の具体的なモデルとなったのであろう。だが、天武の複都制導入の重要なきっかけとなった唐高宗期の複都制は、皇后武氏が主導した可能性が高く、長安を拠点とした唐朝のこれまでの都城制とは異なる。その複都制は、隋煬帝期と似て、ほぼ対等な東西両京が並び立ち、それが皇帝の「両宅」として機能するものであり、その姿は結果的には唐の歴史においても特異なものだったのである。

この認識を七世紀末の倭で現実化させるにあたっては、孝徳朝の巨大な王宮が残る難波をそのまま「都」とすることは何ら問題とはならず、むしろ複都制のあるべき姿として捉えられたのであろう。第四次遣唐使がもたらした情報に基づく高宗期の長安、洛陽の模倣であれば、「主都」「副都」という差異を明確につける必要はなかったことになる。天武が構想した複都制とは、ほぼ同規模の「京」が二ないし三か所に存在することを想定したものであったのであり、各都市が都城としての機能を分担するというよりは「東西の両宅」というべきものであった可能性が指摘できる。これは新

羅や渤海が同じく複都制をとりながら、主都というべき京とその他の都市とは規模の点で明確に差別化されているのは異なる意味を持つものといえる。なお、唐では長安、洛陽の周囲にそれぞれ京畿、都畿が設定されていたが、倭の場合は飛鳥と難波のように一つの畿内の中に複数の都が置かれたことになり、中国の複都制が新たな都城の設定に際し、周囲に強力な王権直轄地というべき畿内を設けることとは明らかに異なっており、日本の複都制を考える上で重要な論点になると思われるが、今後の課題としてい⁽²⁹⁾。

おわりに

隋の文帝期、唐の高祖・太宗期では、洛陽が東方経営の拠点であるものの、都城を置くまでには至らず、大興・長安だけを都城とする単都制であった。隋から唐初期にかけて「複都制」を採ったのは、隋煬帝と唐高宗だけである。隋煬帝期では大興城ではなく、実質的に東都洛陽を主とするが、宗廟や郊壇は大興に置かれたままであり、權威の都である大興と権力のある東都の分立と見なすことができる。唐の高宗期は長安が主であるものの、洛陽もそれに匹敵するほど使用される。皇太子であった敬帝李弘の恭陵造営は長安のみに置かれていた礼制建築が初めて洛陽に別置されたことを意味し、長安の「正統性」の占有に見直しを迫ることになり、次代の武周期の神都洛陽を準備するものとなったといえよう。

高宗期において洛陽が都になったのは物資の集積地という経済的な要因に加え、関中に依拠したこれまでの統治体系に抵抗した皇后武氏の意向が強いと思われる。洛陽の都城化は高宗期に推し進められ、それを受けて武

氏の皇帝即位とともに「神都」となる。つまり、高宗期の複都制の成立は、武氏政権から見れば実質的な神都洛陽単都制への過渡期と見なすこともできる。本論ではふれなかったが武周以後の洛陽の様子を概観しておく。

武周から唐に復された後、玄宗期に漕運改革が成果を挙げると、唐後半には洛陽への就食は見られなくなり〔齊東方二〇一五〕、実質的な長安単都制へと傾斜し、洛陽の地位は名目的な都へと低下し、一つの都（長安）が他の都（陪都）を圧倒するという形が常態となる。事実上の単都制である。高宗期の複都制は、両都の総合力が伯仲していたことが大きな特徴だが、以上のことから、この体制は唐朝では恒久的なものではなく、一方が他方を圧倒する実質的な単都制への過渡的な様相であり、一時的なものだったとみなすことができよう。

このように隋から唐初にかけて明確に複都制といえる時期は隋の煬帝期と唐の高宗期に限定される。日本の天武が複都制を打ち出したのはまさに高宗期にあたっているが、それ以前の齊明朝末に唐に長安と洛陽の「二京」が並立するという情報は遣唐使を通じてもたらされていた。そのため、天武の複都構想の直接のモデルは唐の高宗期ということになるが、すでに述べたようにこの時期の洛陽は単なる陪都ではなく、隋の煬帝が実質的な京師と位置付けた都城プランを、唐の高宗が皇后武氏の意向によって復興したものであった。長安と対等な都が並立する複都制は、唐の歴史で初めてのことである。また、後の玄宗期以降、漕運改革により洛陽の経済的な優位性が薄くなって以降、長安が優勢な地位を保つようになり、複都制の姿は変容する。そうした特異な時期の複都制を天武が取り入れたことになる。天武の複都制の一方の都である難波の核となる難波宮が、飛鳥の宮室を凌駕し、後に生まれる藤原宮に比肩する規模であったのは、単に孝徳の難波

長柄豊碕宮の中枢部を継承したというだけでなく、巨大な都城と宮城が並び立つた唐高宗期の複都制の特異な状況を受けた結果とみなすことができるのである。

註

(1) 近年の複都制に関する主な研究に〔仁藤敦史一九九二、一九九九〕、〔榮原永遠男二〇〇三〕、〔小笠原好彦二〇一四〕、〔山田邦和二〇一六〕などがある。また、東アジアの複都制を論じたものに〔奈良女子大学古代学術研究センター二〇一〇〕所収の諸論考がある。

(2) 『隋書』卷四五・房陵王勇伝「出爲洛州總管・東京小冢宰、總統舊齊之地」。

(3) 『隋書』卷一・高祖紀「開皇」二年春正月…辛酉、置河北道行臺尚書省於并州、以晉王廣爲尚書令。置河南道行臺尚書省於洛州、以秦王俊爲尚書令。…（三年）冬十月甲戌、廢河南道行臺省、以秦王俊爲秦州總管」。

(4) 『隋書』卷二四・食貨志に、「開皇三年、朝廷以京師倉廩尚虛、議爲水旱之備、於是詔於蒲、陝、虢、熊、伊、洛、鄭、懷、邵、衛、汴、許、汝等水次十三州置募運米丁。又於衛州置黎陽倉、洛州置河陽倉、陝州置常平倉、華州置廣通倉、轉相灌注。漕關東及汾、晉之粟、以給京師」とある。隋唐の糧倉については〔難逸麟一九七四〕参照。

(5) 『隋書』百官志下には、隋の文帝期の官制として「雍州、置牧。…京兆郡、置尹、丞、正、功曹、主簿、金・戸・兵・法・土等曹佐等員。并佐史、合二百四十四人」とあるが、他は州には刺史、郡には守を置くこと記すのみである。なお、郡は開皇三年に廃されるが、煬帝の大業三年に州が郡と改められる。後述するように、煬帝期には尹は京兆、河南の兩郡に置かれた。

(6) 仁寿宮は開皇一三年に起工されるが、以後の仁寿宮への行幸記事を『隋書』本紀からまとめると、開皇一五年三〜七月、一七年正月〜九月、一八年二月〜九月、一九年二月〜二〇年十月、仁寿二年三月〜六月、四年正月〜七月で、

この離宮で崩じている。開皇十九年から翌年の十月の間に帰京している可能性もあるが、判然としない。ただ、二〇年正月旦は仁寿宮で迎えており、この離宮で越年していたことは間違いない。

(7) 隋仁寿宮(唐の九成宮)の構造については(中国社会科学院考古研究所二〇〇八)参照。

(8) 『隋書』卷三・煬帝紀・上の仁寿四年十一月の煬帝の詔に「今者漢王諒悖逆、毒被山東、遂使州縣或淪非所。此由關河懸遠、兵不赴急、加以并州移戶復在河南。周遷殷人、意在於此。況復南服遐遠、東夏殷大、因機順動、今也其時。羣司百辟、僉諧厥議。但成周墟堦、弗堪葺宇。今可於伊・洛營建東京、便即設官分職、以爲民極也」とある。

(9) 煬帝による造営当初、「東京」とされた洛陽だが、大業五年(六〇九)には早くも「東都」と改称される。『隋書』にはその理由が記されていないが、『太平御覽』卷一五六・州郡部二に引く『兩京記』に「至仁壽四年、隋文帝(煬帝の誤)於此營建、初謂之東京、有詔闕言事者稱「一帝二京、事非稽古」。乃改爲東都」とある。つまり、京師は一つであるべきということで、東京から東都に改称されたことになる。この説によれば、煬帝期も京師は大興城で、洛陽は実質的に王権の所在地でありながら、正當な京ではなく、ランクの下がる都だったことになる。

(10) 近年、隋唐洛陽城の北東で回洛倉の遺跡の調査が進展し、倉城と南方の漕渠につながると思われる水路が確認されている。成果については(趙振華・張敏二〇〇五)〔洛陽市文物工作隊二〇〇七〕〔洛陽市文物考古研究院二〇一四、二〇一五〕参照。

(11) 煬帝の七廟建設については『隋書』卷七・禮儀志二に「既營建洛邑、帝無心京師、乃於東都固本里北、起天經宮、以游高祖衣冠、四時致祭。於三年、有司奏、請準前議、於東京建立宗廟」とある。高祖廟を別に建てるという意向は煬帝紀の大業三年(六〇七)条に見え、天經宮の造営は『大業雜記』には大業四年(六〇八)のこととして確認できる。

(12) 『隋書』卷三・煬帝紀・下、大業九年(六一三)三月「丁丑、發丁男十萬城大興」。

(13) 『隋書』卷三・煬帝紀・上、(大業元年)三月丁未、詔尚書令楊素・納言楊達・將作大匠宇文愷營建東京、徙豫州郭下居人以實之。

(14) 『隋書』卷三・煬帝紀・上(大業元年三月)戊申の詔「：徙天下富商大賈數萬家於東京」。

(15) 『旧唐書』卷六・則天皇后本紀、載初二年(六九〇)「秋七月、徙關内雍、同等七州戶數十萬以實洛陽。分京兆置鼎、稷、鴻、宜四州」。武則天の神都への徙民については(妹尾達彦一九九七)、(蕭二〇〇八)参照。

(16) 『資治通鑑』卷一八九(武德四年)秦王世民觀隋宮殿、歎曰「逞侈心、窮人欲、無亡得乎」。命撤端門樓、焚乾陽殿、毀則天門及闕。また、『大唐六典』卷七・尚書工部「武德四年平充、乃詔焚乾陽殿及建國門、廢東都、以爲洛州總管府。尋以宮城、倉庫猶在、乃置陝東道大行臺」とある。

(17) 『資治通鑑』卷一九三(貞觀四年六月)乙卯、發卒脩洛陽宮以備巡幸、給事中張玄素上書諫、以爲「洛陽未有巡幸之期而預脩宮室、非今日之急務。昔漢高祖納婁敬之說、自洛陽遷長安、豈非洛陽之地不及關中之形勝邪。景帝用晁錯之言而七國構禍、陛下今處突厥於中國、突厥之親、何如七國。豈得不先爲憂、而宮室可遽興、乘輿可輕動哉。臣見隋氏初營宮室、近山無大木、皆致之遠方、二千人曳一柱、以木爲輪、則夏摩火出、乃鑄鐵爲轂、行一二里、鐵轂輒破、別使數百人齎鐵轂隨而易之、晷日不過行二三十里、計一柱之費、已用數十萬功、則其餘可知矣。陛下初平洛陽、凡隋氏宮室之宏侈者皆令毀之、曾未十年、復加營繕、何前日惡之而今日效之也。且以今日財力、何如隋世。陛下役瘡痍之人、襲亡隋之弊、恐又甚於煬帝矣」。上謂玄素曰「卿謂我不如煬帝、何如桀、紂」。對曰「若此役不息、亦同歸于亂耳」。上歎曰「吾思之不熟、乃至於是」。顧謂房玄齡曰「朕以洛陽土中、朝貢道均、意欲便民、故使營之。今玄素所言誠有理、宜即爲之罷役。後日或以事至洛陽、雖露居亦無傷也」。仍賜玄素綵二百匹」。

- (18) 『資治通鑑』卷一九三〔貞觀五年九月〕又將修洛陽宮、民部尚書戴胄表諫、以「亂離甫爾、百姓彫弊、帑藏空虛、若營造不已、公私勞費、殆不能堪」。上嘉之曰「戴胄於我非親、但以忠直體國、知無不言、故以官爵酬之耳」。久之、竟命將作大匠竇璡修洛陽宮、璡鑿池築山、彫飾華靡。上怒遽命毀之、免璡官。
- (19) 『太平御覽』卷一五六・州郡部二に引く『兩京記』太宗車駕始幸洛陽宮、唯因舊宮無所改制、終於貞觀永徽之間荒蕪虛耗。
- (20) 『旧唐書』卷四・高宗紀下「十二月乙卯、還洛陽宮。…丁卯、手詔改洛陽宮爲東都、洛州官員階品並准雍州」。
- (21) 『旧唐書』卷四・高宗紀下〔麟德二年三月〕辛未、東都造乾元殿成。
- (22) 高宗本人は、特に晩年、洛陽よりも長安を、心情的に自身の居地と考えていたようである。それを窺わせるのが、『旧唐書』卷四・高宗紀下・弘道元年十二月条の死の直前の次の言葉である。「蒼生雖喜、我命危篤。天地神祇若延吾一兩月之命、得還長安、死亦無恨」。
- (23) 『資治通鑑』卷一九一〔武德九年〕建成夜召世民、飲酒而酖之、世民暴心痛、吐血數升、淮安王神通扶之還西宮。上幸西宮、問世民疾、敕建成曰「秦王素不能飲、自今無得復夜飲」。因謂世民曰「首建大謀、削平海內、皆汝之功。吾欲立汝爲嗣、汝固辭、且建成年長、爲嗣日久、吾不忍奪也。觀汝兄弟似不相容、同處京邑、必有紛競、當遣汝還行臺、居洛陽、自陝以東皆主之。仍命汝建天子旌旗、如漢梁孝王故事」。世民涕泣、辭以不欲遠離膝下、上曰「天下一家、東西兩都、道路甚邇、吾思汝即往、母煩悲也」。將行、建成、元吉相與謀曰「秦王若至洛陽、有土地甲兵、不可復制。不如留之長安、則一匹夫耳、取之易矣」。乃密令數人上封事、言「秦王左右聞往洛陽、無不喜躍、觀其志趣、恐不復來」。又遣近幸之臣以利害說上、上意遂移、事復中止。
- (24) 『資治通鑑』卷一九一〔武德九年〕秦王世民既與太子建成・齊王元吉有隙、以洛陽形勝之地、恐一朝有變、欲出保之、乃以行臺工部尚書温大雅鎮洛陽、遣秦府車騎將軍榮陽張亮將左右王保等千餘人之洛陽、陰結納山東豪傑以俟變、多出金帛、恣其所用」。
- (25) 『資治通鑑』卷一九七〔貞觀一八年二月〕上欲自征高麗、褚遂良上疏、以爲「天下譬猶一身、兩京、心腹也、州縣、四支也、四夷、身外之物也。高麗罪大、誠當致討、但命二、三將將四五萬眾、使陛下威靈、取之如反掌耳…」。
- (26) 『太平御覽』卷一五六・州郡部二に引く『兩京記』又曰、太宗車駕始幸洛陽宮、唯因舊宮無所改制、終於貞觀永徽之間荒蕪虛耗。置都之後方漸修補、龍朔中詔司農少卿韋（弘）機、更繕造。高宗嘗謂韋（弘）機曰「兩京朕東西二宅、來去不恒卿宜善思修建」。始作上陽等宮」。
- (27) 恭陵の墳丘規模は東西一五〇、南北一三〇、高さ二二メートルで、陵園は東西、南北とも四四〇メートルである。ただし墳丘は本来、一辺一六〇〜一八〇、高さ三〇メートルくらいと想定される。陵前の石刻は石柱、天馬が各一對、石人三對である。高祖の獻陵は墳丘規模、東西一四〇、南北一一〇、高さ一八メートルで、陵園は東西四四八、南北四五メートルである。神道石刻は石柱と石犀が各一對である。恭陵については調査報告には「若是一九八五」（陳長安一九八六）があるが、数値については最も正確な測量を行っていると思われる（中国社会科学院考古研究所河南第二工作隊ら一九八六）に拠った。また（趙振華ら二〇〇五）も参照。高祖の獻陵については（陝西省考古研究院二〇一三）に拠る。
- (28) 齊明紀、齊明六年七月乙卯条に引く『伊吉博德書』に「十一月一日、爲將軍蘇定方等、所捉百濟王以下太子隆等・諸王子十三人・大佐平沙宅千福・國辨成以下卅七人并五十許人、奉進朝堂、急引趨向天子。天子、恩勅見前放著」とある。このことは『旧唐書』卷四・高宗本紀に（顯慶五年）十一月戊戌朔、邢國公蘇定方獻百濟王扶餘義慈・太子隆等五十八人俘於則天門、責而宥之」とあり、伊吉博德はこの則天門前で行われた赦宥儀礼を目撃したのだろう。
- (29) 中国の畿内については、本稿で度々引用している（蕭錦華二〇〇八）および（大津透一九九三）（礪波護一九九二）参照。日本の畿内についての研究は相当な蓄積があるが、（西本昌弘一九八四）（大津透一九八五）を挙げておく。

【参考文献】

- 宇都宮美生 二〇一〇 「隋唐洛陽城西苑の四至と水系」『中国文史論叢』第六号
 宇都宮美生 二〇一六 「隋唐洛陽城の含嘉倉の設置と役割に関する一考察」『東洋学報』九八巻一号
 小笠原好彦 二〇一四 「難波宮・京と複都制」中尾芳治・栄原永遠男編『難波宮と都城制』吉川弘文館
 大崎正次 一九三三 「唐代京官職田攷」『史潮』第二〇巻三・四号
 大津透 一九八五 「律令国家と畿内—古代国家の支配構造」『日本書記研究』第一三冊(後、同氏 一九九三『律令国家支配構造の研究』岩波書店 所収)
 大津透 一九九三 「中国における畿内制」『律令国家支配構造の研究』岩波書店
 介永強 二〇〇一 「唐代行宮考逸」『中国歴史地理論叢』第一六巻第二輯
 栄原永遠男 二〇〇三 「天武天皇の複都制構想」『市大日本史』第六号
 史念海 一九九七 「長安和洛陽」白寿彝総主編、史念海編『中国通史』第六巻
 中古時代・隋唐時期 上册』上海人民出版社(後、「唐代長安和洛陽」と改題のうえ同氏 一九九八『中国古都和文化』中華書局 所収)
 若是 一九八五 「唐恭陵調査紀要」『文物』一九八五年三期
 朱士光・葉驍軍 一九八七 「試論我国歴史上陪都制的形成与作用」『中国古都研究』第三輯(邦訳に積山洋訳「中国史上の陪都制」(『大阪歴史博物館研究紀要』第一号、二〇〇二年)
 蕭錦華 二〇〇八 「唐前期西京畿内制建立考論」『中国文化研究所学報』四八期
 雛逸麟 一九七四 「從含嘉倉的發掘談隋唐時期的漕運和糧倉」『文物』一九七四年二期
 齊東方 二〇一五 「中国都城の立地環境—長安から洛陽へ—」『都城制研究』九
 東アジア古代都城の立地環境
 妹尾達彦 一九九七 「隋唐洛陽城の官人居住地」『東洋文化研究所紀要』一三三
 妹尾達彦 二〇〇一 『長安の都市計画』講談社
 妹尾達彦 二〇一三、二〇一四 「江南文化の系譜—建康と洛陽」『六朝学術学芸会報』一四、一五
 陝西省考古研究院 二〇一三 「唐高祖献陵園遺址考古勘探与発掘報告」『考古与文物』二〇一三年五期
 瀧川政次郎 一九六七 「複都制と太子監国の制」『法制史論叢』第二冊 京制並びに都城制の研究』角川書店
 館野和己 二〇一〇 「日本古代の複都制」『都城制研究』四 東アジアの複都制
 中国社会科学院考古研究所 二〇〇八 『隋仁寿宮・唐九成宮—考古発掘報告』科学出版社
 中国社会科学院考古研究所 二〇一四 『隋唐洛陽城一九五九—二〇〇一年考古発掘報告』文物出版社
 中国社会科学院考古研究所河南第二工作队・河南省偃師県文物管理委員会 一九八六 「唐恭陵実測紀要」『考古』一九八六年五期
 趙振華・王竹林 二〇〇五 「東都唐陵研究」『古代文明』第四巻
 趙振華・張敏 二〇〇五 「隋唐都洛陽回洛倉的考古勘察」『中原文物』二〇〇五年四期
 陳寅恪 一九四七 『唐代政治史述論稿』
 陳長安 一九八六 「唐恭陵及其石刻」『考古与文物』一九八六年三期
 丁海斌 二〇一二 『中国陪都史』中国社会科学出版社
 礪波護 一九九二 「唐代の畿内と京城四面関」『唐代史研究会編』『中国の都市と農村』汲古書院
 奈良女子大学古代学術研究センター 二〇一〇 『都城制研究(四) 東アジアの複都制』
 西本昌弘 一九八四 「畿内制の基礎的考察—日本における礼の受容—」『史学雑誌』九三編一号(後、同氏 一九九七 『日本古代儀礼成立史の研究』塙書房 所収)
 仁藤敦史 一九九二 「複都制と難波京」『歴博』五三
 仁藤敦史 一九九九 「古代都城の首都性」『年報都市史研究』七 首都性
 傅熹年主編 二〇〇一 『中国古代建築史』第二巻 三国、兩晋、南北朝、隋唐、

五代建築』中国建筑工業出版社

松井秀一 一九六六 「則天武后の擁立をめぐる」『北大史学』一一号

村元健一 二〇一〇 「中国複都制における洛陽」『都城制研究』四（後）、〔村元二〇一六〕所収）

村元健一 二〇一五 「隋の大興、洛陽の二つの宮城」『郵政考古紀要』第六二号

積山洋先生退職記念特集号』（後）、〔村元 二〇一六〕所収）

村元健一 二〇一六 『漢魏晋南北朝時代の都城と陵墓の研究』汲古書院

室山留美子 二〇一〇 「隋開皇年間における官僚の長安・洛陽居住—北人・南人

墓誌記載の埋葬地分析から—」『都市文化研究』一一二

山下将司 二〇〇二 「唐初における『貞觀氏族志』の編纂と「八柱国家」の誕生」

『史学雑誌』第一二二卷第二号

山下将司 二〇〇三 「玄武門の変と李世民配下の山東集團—房玄齡と齊濟地方」『東

洋学報』第八五卷第二号

山田邦和 二〇一六 「日本古代都城における複都制の系譜」仁木宏編『日本古代・

中世都市論』吉川弘文館

洛陽市文物考古研究院 二〇一四 「洛陽隋代回洛倉遺址二〇一二—二〇一三年考

古勘探発掘簡報」『洛陽考古』二〇一四年二期

洛陽市文物考古研究院 一〇一五 「洛陽隋代回洛倉遺址二〇一四年度考古発掘簡

報」『洛陽考古』二〇一五年二期

洛陽市文物工作队 二〇〇七 「河南洛陽市東北郊隋代倉窖遺址的発掘」『考古』

二〇〇七年二期

李永強 二〇一一 a 「隋唐大運河洛陽段相關問題試析」『四川文物』二〇一一年

四期

李永強 二〇一一 b 「隋唐大運河的中心—洛陽」中州古籍出版社

隋唐初期陪都制—作为理解七世纪陪都制的线索

为了考察古代日本陪都制，要论及古代难波。本稿目的是为初步考察陪都制，概观唐代的长安和洛阳，逼近陪都制实质的。因为，认识长安和洛阳就是古代日本陪都制的模特。从隋到唐高宗，采用陪都制的时期是隋煬帝和唐高宗期。隋唐洛阳是隋煬帝营造作为实质都城的城市，唐继承如原样了。为此，洛阳成为匹敌京师长安的都城。高宗册立武则天后以后，重视洛阳。古代日本理解中国陪都制的时期，就是唐高宗期。这个时期是长安、洛阳的实力对等的不一般的时期。洛阳宫规模同等太极宫，因为古代日本遣唐使可能认为陪都制是规模同等的复数都城构成的。前期难波宫规模超过飞鸟宫，大约同等藤原宫的原因是，反映这样隋唐都城实际的。

